

子どもの魂との対話

安島 智子

近年の少年犯罪や児童虐待、大きな災害の被害報道から度々耳にする子どものPTSD（心的外傷ストレス障害）、トラウマといった専門用語は、心理療法に対する認知度を高め「カウンセラー」への期待は高まりつつあるといえる。けれども「魂の影の世界」に操られて自分の意思ではどうすることもできず苦しむ子どもたち、人格の形成や成長を阻み、本人のみならずまわりの人々にも多大な苦しみをも

たらす「子どもの傷ついた魂」とまっすぐに向き合うことが、どんなに厳しく困難で危険を伴うことか、想像できるだろうか。

子どもを脅かす「魍魎ちみもろりよう」をも自由にさせるといふ相談室で、「私は日々、病を入り口に闇に招かれ、光に向かうことから得る豊かさに感動させられております」「苦しくて苦しくて本当に辛いということはありませんけれど、プレイセラピーの過程に

は、この子と出会った嬉しさやこの子と出会って魅せられるというのが、辛くてもあると思います」と、凜と語る安島先生。児童学を出発点に心理療学家として研鑽を積まれた後、十九年前にたった一人で『このはな心理児童学研究』を開き、「子どもの魂」の地平に共に立ち続けてきた安島先生の、現代の子どもの「病み」から見える心の「闇」についてのお話を紹介したい。

——『このはな心理児童相談所』は一九八七年に日本橋で創設され、心理相談室では子どもの心理療法を中心に面接などしてこられたそうですね。「このはな」の命名の由来はどこにありますか。

安島「このはな」は、古事記に出てくる母親と子どもの守り神、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）のことです。浅間神社に祭られている女の神様で、海幸彦・山幸彦の母親です。当時、私のなかで「母親

と子どもを守る場」を産みたいという願いが無意識にあったのでしょね。

——先生のところには、どんなお子さんが相談に来られますか。

安島 最近、公立の相談所や大学で無料で臨床を受けつけるところがたくさんあります。でも、有料のここでは、お金がかかっても子どもを連れてきたい人、無料のところへ行ってもなかなか満足しない、高くても、ここだったら納得するという方たちが来られるので、それだけモチベーションが高いと言えそうですけれども、ケースとしては非常に難しい、現代的なケースが多いのではないかと思います。たとえば、自閉症、「落ち着きがない」子ども、「切れる」子ども、不登校児、「お腹がいたい」、チック、吃音、強迫症状が強い子ども、など様々です。特に、自閉症と呼ばれる子どものセラピーには今まで力を注いできました。自閉症の子どもにとつ

て、本人を脅かしている世界の表出と「身体」感覚の獲得をもたらす関係身体体験がとても重要です。本当のことはセラピーが終わってみないとわからないのですが、幼児期に來談されると、心理療法は大変効果を上げることが確かだと思います。

——遊戯療法に精力的に取り組まれているようですが、臨床の場面において子どもの「遊び」はどんな意味をもつのでしょうか。通常の心理療法では、言語を媒介にして治療が進められるそうですね。心身の機能が未分化で自我の発達の不十分な子どもには、大人とは異なる配慮が必要で、その場合「遊び」そのものに治療的な意味があると伺いましたか。

安島 昔は、遊戯療法というのは、遊んでいれば子どもはよくなるという発想しかなかったのです。けれども実際には、子どもはセラピーの中でも一番難しい。普通はクライアントに対して、九十度あるい

は対面で面接をすることが多いのですが、子どもに對しては三百六十度です。子どもと、どの距離で、どんなかわり方をするのが、最もこの子がこの子としていられる関係性になるのかということが、まず臨床の基本といえます。

プレイルームで遊ぶということは「内界を遊ぶ」ことを意味しています。子どもが心の中をすべて遊びにすることによって、遊びの中で、心の中の苦しさを、どうすることもできない破壊的な世界や恐怖、いろいろな化け物のファンタジーが、一つひとつ表現され、その意味がよく理解される。遊んでも遊んでも、セラピストがその意味を理解できずに、その遊んだ破壊性や、恐怖や、どうしようもなくいてもたってもいられない身体感覚を我がこととして受けとめられない限り、その子の中からその苦しみが去ってはいかない。その場合、発達心理学のみならず、精神分析や分析心理学のような深層心理

学、関係性の心理学がわからなければ、子どもの臨床はもちろんできないといえます。

たとえば、自閉症の子どもに対しては、身体レベルでは強力な関係をつくれるけれども、この子の心にびったり重なってあげないと完全に拒否をされるということも体験してきました。「サイコドラマ」でいう「ダブル」をして、その子と重なりながら、もう一つはもつとクリアな理性的な自分もいますから、重なりながらわかったことから、周囲で今、この子は何にまなざしがいついて、それはどのぐらゐの持続性がある関心事で、この子がずつとどまっているところは何かを理解する。今、ここで、この子がまなざしを向けているそのおもちやと何をしようとしているかを瞬間的に見ぬきながら、かつセラピストは次の遊びの展開がどうなるか考えるわけです。児童学科在学中は、意識を五つに分けるというトレーニングをさせられました。その「サイコ

ドラマ」で学んだ補助自我の技法が今とても役立つています。

発達障害の子どもは、「ごっこ遊び」

「ご遊び」ができるということが一つの終了、重要なポイントといえます。そして、「ごっこ遊び」というのは、おうちの中だけではだめで、このプレイルームで「コーナー間交差ができる」、レストランがあつたり、お店屋さんがあつたりするコーナー間遊びがこの部屋の中でできると、学校生活へ帰っていきけるのです。現実社会の中でもコーナー間交差ができるパーソナリティーになるわけです。

私は、個・集団・社会という発想を児童学から学びました。今、個人セラピーのほかに神話や昔話、おとぎ話のような物語のエッセンスを生かし、「ミ



ソドドラマ」という方法を取り入れ、グループ間関係も視野に置いたグループセラピーをしています。個人セラピーをしても必ず、この子が集団にいるときに、集団にはどんなふうにいることができるだろうかということの一つのアセスメントになっている。

不登校児に対しても、クラスという集団から学校という社会で、この子はどこに足場をつくれれば、居場所ができるだろうかという視点が最も大事です。心だけを見ているのではなくて、個人的心の中にも集団や社会があつて、それとパラレルに現実の集団や社会があるという認識に立って、子どもと出会ったときに、子ども全体のアセスメントができるのです。

——心理療法師の専門性とは、一言でいうと何でしょうか。

安島 セラピストの能力とは、子どもの病態の適切な見立てや子どもの現実世界の場であるところの家

庭・学校・地域の状況を把握しつつ、それらの視野において、子どもが表現した「心の世界」を解かるうとし、共に歩みぬくことだと思えます。心理療法は、「心の世界」と取り組み、「心の世界」を創造していく過程です。この過程こそ、現実の自分の人生を創造する過程だと私は実感しています。ですから、苦悩し病むことは人生の創造へと向かうはじまりだと考え、このようなカウンセリングを、私は「創造的カウンセリング」と呼んでいます。

——長年子どもの心と向きあつていて、最近特に変わったなあと感じられるような、気がかりなケースはありますか。

安島 今、現代的な臨床のテーマというのは、本当は自分の気持ちはこうなのだけれども今は我慢してしよう、というような抑圧ができずに、突然物を投げるなどのケースです。子どもの心の中に、まったく自分を感じようとする力よりも、その子自身

を破壊していく力のほうが無意識の中で大きくなっているのです、突然物を投げつけてしまったりするわけですね。

その子自身がやりたくてそうしているわけではなくて、そんなことをやる自分というのがとても悲しくて、すごくつらいのだけれども、気がついたら、そうしてしまっているのです。そういう子どもは、目に見える強迫性があったり、鬱になって食事がほとんど摂れなくなっているとか……、そういう意味では、今申し上げたようなケースは、かつてあった「子どもはこういう姿」とは異なる姿の子どもです。子どもの鬱とか、普通学級にいて、普通に学力があって、普通にやり取りができるにもかかわらず、突然「切れる」状態になってしまうというのは、十年ぐらい前からだと思います。

——そのような子どもの問題行動は、なぜ発生するのでしょう。子どもに起きていることは当然大人に

も起きていて、子どもも大人も病んでいるということでしょうか。

安島 私は、日本という国はものすごい危機の中にあるような感じがします。世界の大国というのは、自給自足ができますよね。日本は、相当早い時期に田畑を荒らして農業を粗末にして、食べることに、耕すこととか、土の底から生きぬいていけるというようなたくましさを失ってしまって、非常にきれいな上澄みの部分だけでまわっているような気がします。

もともと人間というのは、そういうきれいなところだけじゃなくて、泥もあるし、汚いところもあることを知っているからこそ、下水道・上水道をしっかりとしようとする発想もできる。親たちも、子どもをきれいに育てたがり、生きること、生命から切り離された人工の基盤に足場を置きたがる傾向がある。生活そのものもオール電化して、暖をつくる、

本物の火に当たるといふことも日本人は疎かにしてしまっているので、人間が人間たり得た、動物たり得たといふところのエネルギーは少ないと思うのですね。だから、生きぬく力というのがすごく弱い。私は、学力も小学校入学までの「幼児力」があれば、頭のいい、気立てのいい、生活力のある子どもになると思うのですが、残念ながら、私に言わせれば今の子は「幼児力」がない。六歳までに育っているはずの基本的な力が育たないまま、小学校を迎えてしまっているという子どもが多いのではないかなと思いますね。

——「幼児力」について具体的に説明いただけますか。

安島 たとえば数の概念にしたって、「僕は鉛筆を十円で二本買って、五円で消しゴムを一個買ってこようと思ったので、お母さんに二十五円もらいました」という問いを口で言ったときに、鉛筆二本に対

して十円玉二個の想像がつき、消しゴム一個に対して五円玉が想像つくかどうかということですよ。

こういうことは数の概念の基本で、ビネーの例だと一対一対応ができるかどうかという問題です。それから、二歳の問題で、三つを二つと一つに分ける、そのレベルのことだと思えます。そのレベルのことが、数の概念としても育っていない。

文章題ができないというのは、その一対一対応がついていけないので、すぐ計算式を考えようとする。けれども大切なのは、このお話はどういうお話で、鉛筆が二本ということがすぐ絵に描けるということ、その文章に対応した絵が描けるということですよ。そういうことが私の言う「幼児力」ですね。それは六歳までに十分できているはずのことですね。ビネーには状況の不合理を問う問題がありますね。四歳から六歳ぐらいまでを対象としていたと思うのですが、「犬と鳥はどういうふうに違いますか」と

いう質問に、犬の姿が思い浮かばない、鳥の姿が思い浮かばない。この問題だけを考えてしまう。

ところが「幼児力」があれば、「犬なんて、タロウちゃんちにいるよ、いつも見てるよ」「決まってるじゃない、四本足に」、「鳥って、スズメでしょう。スズメって朝からうるさいんだ」、「犬は足が四本だけど、鳥は二本しかないから違うでしょう」と答えられる。そういう生きたスズメを感じるとか、犬を感じる力が最近はやっている。

また、雨の中でたばこを吸っているような絵を見たときに、どこもおかしいと思わない。雨の線がおかしいとかね。幼児だったら、雨が降ったらぬれちゃって火が消えるということを知っていると思うのですが。今、火が全部ガスや電気の点火になっているので、外でたばこを吸う不合理性が理解できない。だから、雨の中で寛いでいるのはおかしいという問題に結果的に変わりましたね。一九八七年に改

定したのを、一昨年また改定した。それは、生活が変わってしまったから。今の生活に合わせた問題に変えているのですが、かつてあったはずの「幼児力」が今なくなっている。

結局、生きて感じる力を育てる幼児教育こそが、一番重要な課題かもしれませんね。そして、小さいお子さんを育てていくことになるお母さんたちの心のケア、それを妊娠中から行っていく必要性を今痛感しています。

(このはな、心理児童相談所)

後記

臨床相談の場として出発した、『このはな心理児童学研究所』は、今や独立した研究教育機関にまで発展している。安島先生が中心となって、臨床心理士の資格取得を目指す方、大学・大学院で基礎的な

教育を受けた上で更なる実践的技法や専門性を高めようとする方を主な対象に、講演会やセミナー、ワークショップを企画・運営し、学会のリーダーとしての幅広い人脈を活用し、臨床の質を高めるため、大学や学派の枠を超え、それぞれの分野の第一人者が直接指導にあたる研鑽の場を用意している。

心理臨床の基礎的理論の徹底と、遊戯療法・箱庭療法・ロールシャッハ・芸術療法・ミソドラマ・ロールプレイ・家族療法といった多様な技法の習得、事例研究、乳幼児期から老年期までの生涯にわたる課題の現代的意味を心理療法的観点から分析する講座など、どれも魅力的だ。心理相談に加え、後身の育成や学会の運営にも精力的に尽くされている安島先生の存在感に、今回ただただ圧倒されるばかりだった。

「団塊の世代は、この国がどうあるべきか激しく問いつめなくては気が済まない世代」と自嘲気味に語

る安島先生のまなざしの奥には、子どもたちを苦難と絶望の淵に追いやってきた現代社会に対する強い憤りと深い悲しみが宿っているようで、過激なまでに母子の守り手とならんとする古代の女神の姿が重なった。

インタビュー 平成十七年八月一日

聞き手 首藤美香子

参考資料

安島智子「遊戯療法による象徴」『現代のエスプリ』第389号至文堂一九九九年

「創造的カウンセリングの発想と展開」『このはな心理臨床ジャーナル』第七号二〇〇二年

「日本遊戯療法研究大会第六回大会 基調講演『遊戯療法と子どもの魂』」二〇〇二年

「このはな心理療法セミナー」二〇〇五年版パンフレット